

〈論説〉

ベルリンの壁の犠牲者 ——最初と最後のケース——

近 藤 潤 三

1. 論議の中の犠牲者

2009年はベルリンの壁が崩壊して20年、2010年は東西ドイツの統一から20年に当たる。そのため兩年にはドイツ現代史のみならず、世界史的な意義を有するこれらの出来事に関連した記念日が連続することになる。しかしその第一弾ともいえる2009年2月5日は思いのほかひっそりと過ぎた。それは1989年2月5日の出来事が今では多くの人々の記憶の片隅にしか残っていないからであろう。その出来事というのは、ベルリンの壁が崩壊する9ヶ月前に国境警備兵の銃撃によって壁で最後の犠牲者が出たことである。クリス・ギュフロイという青年がその人である。淡々と日常が流れたのは8月24日も同じだった。この日はベルリンの壁の最初の犠牲者が生じたことで知られている。本稿ではベルリンの壁の最初と最後の犠牲者に光を当てるが、彼らがマス・メディアの世界でもほとんど想起されないのは、壁の崩壊までよりも崩壊後の現代史の重みが大きいいことを示しているといえよう。「壁の犠牲者の章は東ドイツが残した最も悲劇的な遺産である」としながら、O.ゲアスが「転換後に壁の犠牲者の追憶のために存在する空間は小さい」と記しているのは、⁽¹⁾決して誇張ではないのである。

ところで、「最も悲劇的」といわれるにもかかわらず、ベルリンの壁での犠牲者の数は調査機関によって異なっており、定説といえるものは存在しない。それは正確な事実確認が難しいという理由によるだけではない。C.ブリオンがいうように、「ベルリンの壁で何人が死亡したかという問題は多年にわたって研究者とSED（旧東ドイツの独裁政党だった社会主義統一党の略称…著者）

の被害者との間のイデオロギーに彩られた論議的になってきた」という事情があるためである。²³⁾しかし、これら以上に本質的な理由が存在することを見逃してはならない。この点について、2006年34号の『ツァイト』紙上でE.フィンガーはこう記している。「我々はおそらく今後とも正確な犠牲者の数を得ることはないだろう。というのは、暴力的な性格と犠牲者の存在をまるごと隠蔽することは独裁の本性に属しているからである。それゆえに歴史家たちはこれからも紛らわしい文書のメモ、消滅した調書、虚偽の事故報告書と取り組まねばならないだろう。」²⁴⁾

もちろん、そうはいっても犠牲者数は不明として扱われてきたわけではない。しばしば使われているのは、138人という数字である。例えば壁の建設が着手された日である8月13日にスターリン主義被害者連合（略称VOS）が東ドイツにおける抑圧を忘却に委ねないために毎年集会を催しているが、その場でもこの人数が挙げられ、参加者の男女が交互に犠牲者全員の名前、死亡日時などを読み上げている。²⁵⁾そこで犠牲者に数えられているのは、警備兵の発砲によって落命した人、壁の一带に敷設されている地雷で死亡した人、東西ベルリンの境界であるシュプレー川や運河で溺死した人であり、実数はもっと多いと推定されるが、最低でも138人というのが共通認識になっている。したがって、この見方からすれば、ギュフロイはその最後、すなわちベルリンの壁での138人目の犠牲者ということになる。

その一方で、2009年8月にポツダムの現代史研究センターとベルリンの壁記念館のスタッフが各種の資料の精査とインタビューなどをもとにした新たな調査結果を一書にまとめて公表した。犠牲者一人一人について人物像をまとめたこの書は正確さの点で抜きんでており、今後の議論で重要な位置を占めると考えられるが、それによると、死者の総数は136人になるという。これには逃亡の意図がないのに誤って殺害されたり事故で死亡したりした30人が含まれているほか、逃亡者や逃亡を幫助する者の反撃などによって死に至った8人の国境警備兵も数えられている。²⁶⁾この点は壁の犠牲者の定義に関わる問題であり、とくに警備兵を含めることには疑義が呈されている。例えばベルナウアー通り

にあるベルリンの壁記念館では犠牲者を追悼する趣旨で2009年中に一人一人の人物像を記した「記憶の窓」を設置することが計画されているが、そのなかに警備兵が入っていないのは、彼らを犠牲者とは見做さない立場の故である。けれども、警備兵を殺害した逃亡幫助者が西側で裁判にかけられたことが示すように、見方によっては警備兵も犠牲者であり、とりわけ逃亡を図る市民に発砲することに関しては、阻止しなければ厳罰に処せられたにもかかわらず、それをためらい、あるいは故意に標的から外すなどの対処をした者がいた事実を踏まえれば、彼らを犠牲者から除外することに疑問が残るのも確かであろう。2009年8月13日付『ジュートドイッチェ』紙に掲載された「誰もが追憶に値する」という論説でT.デンクラーが「記憶の窓」を批判しているのは、¹⁶このような立場からである。

ところで、最後の犠牲者に関して正確を期していえば、ギュフロイの後にも東西間の越境を企てて死亡した東ドイツ（DDR）の市民がいる。名前をヴィンフリート・フロイデンベルクといい、3月8日に熱気球で東ベルリンから脱出しようと試み、ツェーレンドルフまできて墜落して死亡したのである。¹⁷その意味では、ドイツ分断の最後の犠牲者というならば、それに当たるのはフロイデンベルクであり、現にポツダム現代史センターの上述の書では犠牲者の最後に位置づけられている。因みに、ギュフロイより1カ月余り前の1月13日にはインゴルフ・ディーデリヒスという25歳の青年が越境を試みてやはり事故で死亡している。また銃撃に限れば、4月8日に越境しようとした東ベルリン出身の2人の青年が威嚇射撃を受けて逮捕される事件が起き、これがベルリンの壁における最後の発砲になったとされている。¹⁸

それはともあれ、2009年2月5日の前後には若干の新聞に壁での射殺という痛ましい出来事を追憶する記事が掲載された。けれども、事件から丁度20周年を迎えたにもかかわらず、『シュピーゲル』のような代表的な週刊誌や『フランクフルター・アルゲマイネ』紙のような主要な全国紙には関連記事は載らなかった。このことは、既述のように、その悲劇に対する記憶が薄れてきており、もはや一部の人の脳裏に焼き付けられているだけになっている証左であろう。

実際、2007年8月に『フランクフルター・アルゲマイネ』紙上でR.メンヒは「ほとんど忘れられた境界上の事件」という見出しの記事を載せ、「壁での死者の名前を誰が覚えているだろうか。それはごく僅かな人たちの集合的記憶に刻み込まれているだけである」と記している。また同時に、「1990年から2005年までの壁での銃撃者裁判の間に、殺害された者の遺族、すなわち父と母、妻、友人たちにはほとんど注意が払われなかったことが明白になった」ことを指摘し、記憶が風化しつつある実情を伝えている。⁽⁹⁾

この点に照らすと、例えば『フォークス』誌上でA.フーラーがギュフロイについて執筆した記事は貴重なものだったといえよう。というのは、彼は見出しに「転換は9カ月遅すぎた」とつけ、事件の概要を伝えながら、21歳の若者の早すぎた死を哀惜しているからである。⁽¹⁰⁾無論、それによってベルリンの壁が招いた悲劇の記憶がどれだけ呼び覚まされたかは定かではない。ともあれ、以下ではこの記事をはじめとして、若干の資料を参照しつつ、ベルリンの壁での最後の悲劇を概観してみることにしよう。またその事件を孤立化させるのを避けるため、続けて最初のそれについても論じよう。その上で警備兵に対する裁判などに言及し、最後に悲劇の意味を考えてみることにしたい。

2. クリス・ギュフロイ

周知のように、冷戦の最中の1961年に構築されたベルリンの壁は東ドイツでは「反ファシズム防護壁」と呼ばれていた。それは、「西の軍国主義者、復讐主義者、独占資本家から国民を守るための近代的な平和の国境、反帝国主義の防壁」だと説明されたのである。一方、西ドイツからみると、それは「1700万のドイツ人の意思に反して建てられた恥辱の壁」であり、ケネディ大統領の弟ロバート・ケネディ司法長官が1962年に西ベルリンを訪問した際に述べたように、「自国民を中に閉じ込めるために障壁を築かなければならない政治体制は人類史上はじめて」であることに照らせば、共産主義の非人道性の極致にはかならなかった。⁽¹¹⁾そうした政治的色彩を取り除いても、ベルリンの壁はグロテ

スクな物体だった。E.ヴォルフムがいうように、「西ベルリンからみると壁は1980年代に世界中の多数の芸術家が自分を永遠に残すための色とりどりのキャンバスだったが、東側では死の地帯が最新の電氣的機材で完璧化されていた」からである。¹²それでは東西の体制が激しく衝突するこの壁で最後に死んだギュフロイとはどのような人物なのであろうか。

クリス・ギュフロイは1968年にポーランドとの国境に近い東ドイツ北部のバゼヴァルクで生まれた。¹³5歳のときに彼が母親とともに転居して成長したのは東ベルリンであり、運動の才能があった彼は選ばれてヨハニスタールのスポーツ学校に通った。オリンピックで多くのメダルを獲得したことで知られるように、DDRでは競技スポーツの振興は国威をかけた主要事業であり、スポーツ学校で学ぶことはエリート予備軍に編入されることを意味した。しかし1985年に学業を終えると1987年まで彼は給仕としての職業訓練を受けた。というのは、スポーツ学校に続いて国家人民軍の将校になる道が用意されていたが、これを拒否したために上級学校への進学が閉ざされたからである。そうした事例はほかにも存在する。J.レーゼは3度目の試みで逃亡に成功した若者について伝えているが、その若者は信仰心の篤い家庭で育ち、ピオニールなどに加入しなかったために大学はもとより上級学校に進むことを許されなかった。同様に、A.レオがインタビュー調査した1961年生まれの男性も学校当局からやはり将校の道を推薦されたが、これを拒否したために進学してグラフィックを学ぶ可能性が奪われた。ただ、この人物の場合はのちにDDR逃亡を考えたものの、親友が失敗して逮捕されたことから断念し、DDRの最終局面で反対派として活動を始めた点にギュフロイとの違いがある。¹⁴いずれにしても、DDRでは進学の際に国家と社会主義への忠誠や従順が重要な条件とされており、それを満たさないかぎり、本人の希望や能力は意味を持たなかった。そればかりか、この条件に反すると進学の断念だけでは済まず、差別さえ受けたのであり、ギュフロイはこの段階で出世の道から転落したといえよう。

職業訓練の場所はシェーネフェルト空港にあるホテルだった。しかし、そこでも彼は腐敗が横行しているのを目の当たりにし、不満を募らせたという。少

年の頃には、東ドイツでスポーツ選手が子供たちのヒーローだったことを反映して、世界的な体操選手になることを夢見ていた。しかし彼にはそのほかにアメリカに行きたいという希望と自由の中で暮らしたいという願望があった。彼は親しい人にDDRではいつも後見を受け、自分で物事を決められないと不満を洩らしていた。職業訓練中に上司と衝突したのも、腐敗への怒りと拘束への反感からだった。そのために彼はDDRから出国したいと考え、その願望は友人の中に出国に成功した者があったのでますます強まった。さらに1988年秋に彼には徴兵により国家人民軍に召集されることが定められていたが、その時期は都合により1989年5月に延期されていた。したがって、兵役に就く前にDDRを逃れることを彼は計画したのである。

もちろん、理論上は出国許可を申請するという道がギュフロイにも開かれていた。また現実には1980年代のDDRでは西ドイツへの経済的依存度が高まるにつれ、その見返りとして人的交流が拡大し、出国申請が許可されるケースも増えていた。けれども、それでもなお申請が認められる可能性は低かったばかりでなく、申請しただけで職業面、私生活面で差別や嫌がらせを覚悟しなければならないことは公然の秘密だった。そのため、彼は一度も出国許可の申請はせず、最初から逃亡を企てたのである。

その逃亡計画はテューリンゲンで国境警備兵として勤務している友人からもたらされた情報によって具体化した。それは、ベルリンの壁と内部国境での発砲命令が撤廃されたというものである。それが本当なら仮に越境に失敗しても逮捕されるだけで済み、銃撃されることはないことになる。無論、共和国逃亡はDDRでは重罪であり、長い刑期と苦難の人生しか待ち受けていなかったが、⁹⁵少なくとも射殺されることがないことは恐怖心を緩めたであろう。また2月上旬にはスウェーデン首相のDDR訪問が予定されており、訪問期間中はとくに安全だと予想された。これらの情報は後から見れば間違っていたが、ギュフロイの願望を強め、逃亡への勇気を奮い立たせることになった。こうして1989年2月5日の夜にギュフロイは職業訓練を通じて親しくなったクリスティアン・ガウディアンとともにDDR逃亡を決行するにいたったのである。

母親のカリンはその夜11時半過ぎに自宅の居間で銃声を聞いた。彼女の住まいはトレプトウのジュートオスト・アレーにあり、ベルリンの壁に近かったからである。しかし銃声には驚かなかった。というのは、逃亡者が実際にいた場合はもちろん、そうでない時にもしばしば警備兵が発砲していたからである。そもそもカリンは息子が不法越境を計画していることを知らなかった。ギュフロイは周囲にプラハに旅行にいくと語っていたからである。だから、その夜に銃撃を浴びていたのが、息子のクリスであるなどとは彼女は夢にも思わなかったのである。

その夜、9時に住まいを出た二人の若者は、厳しい寒さの中をトレプトウの家庭農園地区で腹ばいになり、周囲の様子をうかがいながら東西ベルリンの境界に向かってゆっくりと進んでいた。彼らの計画は東ベルリンのトレプトウから西ベルリンのノイケルンへと、シュプレー川の支流のブリッツァー運河を伝って脱出することだった。この地点が選ばれたのは、運河の幅が10mに満たないためだったであろう。また監視塔からも距離があり、塔の上から発見されにくいと思われたのも一因だったと推測される。このように脱出に適した場所で3時間かけて彼らは最後の金網の柵の手前まで辿り着いたのである。すでに難関の壁を越え、この地点まで到達したことで計画は成功するように思われた。しかし5メートル離れた柵に近付いた時、警報が鳴り響いた。25m間隔で設置された258番照明灯と261番照明灯の間にはこの夜、徴兵で国境警備に配属されていた4人の若い警備兵が配置されていたが、最初に2人の警備兵が警報に気づき、ギュフロイたちに向かって銃撃した。二人は柵に沿って駆け出し、持参した携帯用の梯子を使ってこれを乗り越えようとした。この時、さらに二人の警備兵が加わって発砲した。銃弾は頭をかすめて柵に当たり、ガウディアンがほとんど柵を越えそうになった時に足に命中した。それとほぼ同時にギュフロイが突然倒れた。警備兵インゴ・ハインリヒが撃った2発の弾が彼の足に当たり、3発目の弾丸が狙い通りに胸を撃ち抜き、心臓を引き裂いたのである。これによりギュフロイはしばらくして絶命した。距離は40メートルもなかったから、至近からのこの発砲は処刑に等しかったとも評されている。

ガウディアンは負傷したが、生命に別条はなく、地上に横たわっているところを警備兵に逮捕された。転落したのが東ベルリンの側だったからである。駆け寄ってきた4人の警備兵は2人に「豚野郎」という罵声を浴びせ、「動いたら引き金をひくぞ」と威嚇した。また警備兵の1人は仲間が制止するまで、瀕死の重傷で呻いているギュフロイの体を調べた。負傷して動けなかったガウディアンは、しかし意識を失う最後の瞬間に身分証明書を柵の向こう側に放り投げた。その結果、事件と犠牲者の名前が西側で知られるところとなった。実際、銃声を聞いて西ベルリン側に様子を見守った住民が存在したので、DDR外務省は西側メディアの照会に対して曖昧な回答で隠蔽しようとしたものの、隠し通すことはできなかった。2月7日付の西ドイツのマスメディアは、約10発の銃声を聞き、生死不明の2人が運ばれるのを目撃したという住民たちの証言に基づいて一斉に事件を報じたのである。

ギュフロイとガウディアンが銃撃されたのは23時40分ごろであり、トラバントに押し込められて2人は警備隊の本部に連行された。呼び出された警備隊の医師が0時15分にギュフロイの死亡を確認した。負傷したガウディアンは簡単な手当てを受けた後、すぐに国境警備隊ではなくシュタージによる取り調べを受けたが、逃亡の企てについて彼は一切語ろうとしなかった。これに対し、自供しない限り、怪我の治療をしないと脅迫されたばかりか、殴られたり蹴られたりしたという。3週間後、バンコウの地区裁判所で彼は不法越境未遂の罪で3年の自由刑の判決を受けた。そしてライブツィヒでの月曜デモの高揚とDDRに君臨したホーネッカーの失脚という激動の渦中にあった1989年10月17日に彼の身柄はいわゆる自由買いで西ドイツに引き渡されたのである。

既述のように、ギュフロイの母親のカリンは銃声を聞いたものの、それが息子の死を意味していたことは夢想だにできなかった。それどころか、クリスは母親から離れて一人暮らししていたから、2日たっても彼女は息子の悲劇を知らなかった。この日、制服をまとった男が玄関口に現れ、「事態の解明」のためにアレクサンダー広場の警察署まで同行するように彼女に告げた。この言葉が人民警察ではなくシュタージに特有の用語であることは一部で知られていた

が、その時に彼女が判別できたかどうかは不明である。警察署では1時間半にわたって息子について聴取された。しかしまだその死については知らされなかったもので、何が問題になっているのか彼女にはわからなかった。クリスの死亡を告知されたのは聴取が終わろうとしていた時であり、「軍事施設への襲撃」で命を落としたと告げられた。この表現もまた越境での死亡を意味するDDR特有の言い回しである。彼女は崩れ落ちそうになったが持ちこたえた。息子を殺害した国家の手助けを拒否したのである。

2月21日に西ベルリンで発行されている『ベルリン新聞』紙上にクリス・ギュフロイの死亡公告が掲載された。そこではベルリンの壁や銃撃には言及されておらず、ただ彼の死は「私たちすべてにとって不可解である―彼はまだとても若かったのに」とだけ記されていた。そして23日にパウムシュレーンヴェーク墓地で埋葬することが告げられていた。この公告に関してはシュタージの大臣ミールケがホーネッカーに送った書簡の中で、シュタージがそれを阻止しようと試みたが失敗したと述べられており、母親カリンと家族のDDR国家に対する精一杯の抵抗が表れている。その上、カリンは身内、友人、職場の同僚たちに2月5日の夜に何が起こったかを語っており、銃撃による殺害をもはや秘密裏に片づけることができなくなっていたことも彼女の怒りの結果だった。

こうして事件は西側の知るところとなり、埋葬式当日には100人もの市民が参列したうえ、墓地の周辺を立ち入り禁止にしたにもかかわらず、西ドイツのメディアが取材に押しかけた。また同時刻に銃撃現場の運河を挟んだ西ベルリン側では追悼のための十字架が設置された。こうして関心が高まった結果、DDR指導部は壁での殺人に対する西側諸国の批判に晒された。そのため、ペレストロイカに乗り遅れて低下していたDDRの国際的威信が一段と損なわれただけでなく、経済の慢性的停滞に苦しみ、西側からの借款に対する依存を深めていたDDRにとって事件は手痛い一撃にもなったのである。⁹⁶1989年4月3日に「不法越境阻止のための銃器の使用に関する指示」が最高指導者ホーネッカーの了解のもと、国防相の口頭の命令によって撤廃され、国境警備兵に発砲が許されるのは緊急避難の場合に限定されたのは、⁹⁷ギュフロイ事件が引き起

こした波紋の帰結だったのである。

ところで、銃撃した4人の警備兵には当初、ギュフロイの死は知らされず、2人の逃亡未遂の若者は負傷しただけだと思っていた。1人が死亡したことを彼らが知ったのは事件から数週間後に新聞に小さな記事が出たためだった。国境警備兵の逃亡を防止するために兵士の配置は頻繁に変えられており、4人は事件までは互いに知らなかったが、事件後に間もなくばらばらに転属させられた。同時に、彼らが事件当日に任務に就いていたことを示す記録や、その部隊に所属していた記録など射殺の証拠となるものがすべて破棄された。

それにもかかわらず、内部国境とベルリンの壁は依然として国家としてのDDRの存立基盤になっていたから、結果的に殺人行為になったとしても共和国逃亡を阻止した国境警備兵は任務に忠実だったとされ、処罰されるのではなく、反対に表彰されなければならなかった。また逃亡者を見逃したり、発砲しても故意に狙いを外したりした場合には警備兵自身が懲罰を受けたから、逃亡阻止に成功した警備兵に対する表彰の必要性はますます大きくなった。こうして記録が隠滅される反面で、4人の警備兵は国境警備隊の功労賞を授与され、各自が150マルクの報奨金を受け取った。しかし悲劇から9ヶ月後にベルリンの壁が開放され、国家としてのDDRが翌年に消滅すると、彼らの行為に対する評価も一変した。後述するように、1991年に4人はベルリンの裁判所で被告席に立たされ、壁での殺人の罪を問われることになったのである。⁹被告はいずれも徴兵により国境警備隊に配属された若者であり、電気工インゴ・ハインリヒ（26歳 年齢はいずれも初公判当時）、機械工マイク・シュミット（26歳）、電気工アンドレアス・キューンパスト（27歳）、電気工ペーター＝ミヒャエル・シュメット（26歳）である。

いわゆる「ベルリンの壁」裁判ではDDRの最高指導者だったホーネッカーたちをはじめとして、中間的地位の者、末端の兵士までが裁かれた。またその裁判には統一でDDRを事実上併合した西ドイツによる勝者の裁きという批判があり、DDRの国内法規に従った行為を統一後に不法として処断することに疑問が投げかけられた。そうした批判の可否はともあれ、法廷の場で4人は責

任を追及されたのである。このように命令に従った4人はドイツ統一後にそれなりの苦労を嘗めたが、一方、4人の上官であり、トレプトウ地区の国境警備隊の政治将校だったS.ヒュープナーは罪に問われなかった。そればかりではない。身替わりの早かった彼は、DDRの守護から転じて今では連邦警察の幹部に納まっているといわれている。

存命ならば35歳の誕生日に当たる2003年のその日にギュフロイが射殺された場所に追悼のための板状の墓碑が設置された。これによって彼はドイツ分断の歴史的事実とともに長く記憶されることになった。しかし彼自身はベルリンの壁の犠牲者としてそれが崩壊する9カ月前に21歳の若さでこの世から去ってしまった。そして彼の悲劇は追憶のための努力に反して忘却の波に包まれようとしているのが昨今の状況だといえよう。

3. ギュンター・リトフィン

ところで、ギュフロイが最後の犠牲者だとすると、最初の犠牲者は誰であり、またいつ頃その悲劇は発生したのだろうか。関連してこの点についても簡単に触れておこう。

ベルリンにある一つの通りが2000年にリトフィン通りと改称された。それはギュンター・リトフィンという人物が育った場所だからである。改称に際しては住民から反対があり、とくに東ドイツの独裁政党だった社会主義統一党（SED）を継承する民主社会党（PDS）の人々からはリトフィンは国家を裏切った犯罪者だという声が上がった。というのは、リトフィンこそベルリンの壁の最初の犠牲者であり、東ベルリンから西ベルリンへ逃亡しようとして射殺されたので、東ドイツを支持する立場からみれば裏切り者に映ったからである。

リトフィンが東西ベルリンの境界で銃弾に斃れたのは、ベルリンの壁の建設が着手されて11日目の1961年8月24日のことだった。1937年生まれの彼はその時まだ24歳の若さだった。¹⁹裁縫師としての職業訓練を修了したリトフィンは西ベルリンのツォー駅に近い流行服飾専門店で勤務していたが、病気の母親と

同居していた関係で住居は東ベルリンのヴァイセンゼーにあった。当時約9万人の東ベルリン市民が西に職場を持っていたといわれるが、リトフィンもその一人として毎日境界を超えて通勤していたのである。職場が西ベルリンである上に、退廃的な仕事に従事しているという理由で彼には疑惑の眼差しが向けられていたが、その疑惑は政治的に信頼できない家庭の出自であることによって一段と濃厚になっていた。食肉マイスターだった彼の父親は戦争終結後、CDUに入党し、1948年に同党が独立性を失い、幹部が西に逃れたあとは、SEDの衛星政党になったCDUを支持するのを拒否した。彼は地下に潜って東のために西ベルリンで会合を続けたCDUに忠実だったのである。息子のギュンターも西に移ったCDUの東における非合法的なメンバーだったとされるが、真偽は確かではない。ただ、C.ブレヒトはリトフィンの簡単な伝記のなかで、彼の「家族はDDR創設と社会主義建設を受け入れないミリューに根ざしていた」と記し、1957年にギュンターと弟は、ブロック政党になったDDRのCDUとは異なり、東ベルリンで非合法に活動していた西ベルリンのCDUに入党したと断定している。

1961年夏、リトフィンは西ベルリンに移住することを計画し、職場の近くのスアレス通りに新たな住居を見つけていた。8月12日にそこで弟とともに彼は夜遅くまで部屋の整理をし、深夜になってSバーンで東ベルリンの自宅に帰った。それは後からみると、東西ベルリンを結ぶ最後の電車になった。13日には西ベルリンに行くことは不可能になっていたからである。この日の早朝に後年東ドイツに君臨することになるホーネッカーの指揮のもと、周到な準備の上で壁の建設が始まったのである。これによりリトフィンは文字通り一夜にして職を失い、人生設計も狂ってしまった。とくに彼は西への移住を計画していたから、それを突如阻止されたことへの怒りがどれほど大きかったかは察するに余りある。リトフィンはしかし簡単には移住を諦めなかった。それどころか、すぐに彼は自転車で壁の建設現場を見て回った。それは彼が西への脱出を即座に決断し、もっとも容易に越境できる地点を探るためだった。彼は家族にはその決意を一言も洩らさなかったが、母親や弟は彼の企図を察知していたとハンス

は伝えている。

8月24日の夕方4時過ぎにリトフィンはベルリン・シュパンダウ運河の岸をフンボルト発着場に向かって人目を避けて歩いていた。少し先にはSバーンのレールター駅の近くに係船場があり、その上には11日前に閉ざされた東西の境界をまたぐ形でSバーンの橋がかかっていた。運河の水面は他の場所よりも広くて140メートルの幅があったが、向こう岸は西ベルリンのイギリス地区だった。そこで飛び込んでいたなら、水泳に自信があったリトフィンはおそらく逃亡に成功していただろうといわれる。しかし彼はそこでは運河に入らず、栈橋のある橋のたもとまで歩いた。その時、橋の上から「じっとせよ」という声が突然飛んできた。橋には交通警官が配置されており、リトフィンは見つかったしまったのである。しかし彼はその命令には従わず、栈橋まで走って運河に飛び込んだ。そして右手に橋を見ながら向こう岸を目指して泳いだのである。これに対し、警官はリトフィンを制止しようとして何度も発砲した。そして彼が岸から20メートルほど離れたところで別の警官が自動小銃で目の前を威嚇射撃した後、リトフィンに命中させたのである。弾は首から顎を貫通し、リトフィンの体は水中に没した。

銃声を聞きつけて対岸には西ベルリン市民が300人も集まった。その環視のなかで2時間後にリトフィンの死体が引き揚げられた。数日後に80人ほどの関係者が列席して彼の遺体は埋葬されたが、ベルリンの壁の建設に伴う最初の犠牲者は大きな反響を東西に巻き起こした。西側では共産主義とその国境監視の非人間性が証明されたという論調が中心であり、越境を企てて落命したリトフィンは自由のための闘士だったように描かれた。これに反し、東ドイツでは最初は事件について沈黙が守られたが、1週間するとSED機関紙『ノイエス・ドイッチュラント』で報じられた。しかしその報道は越境者の射殺の正当化とリトフィンに対する誹謗中傷で埋められていた。そこではまず、不法な越境を阻止するために世界のどこでも警備の兵士や警官は武装していることが指摘され、「国境を實力で突破する試みに対して彼らが武器を使用したのは、義務を遂行したまでである」として、射殺を東ドイツに限られない一般的な国境警備

の一環だと強調している。その一方で、西ベルリンの流行服飾専門店で働いていたことを理由にしてリトフィンが同性愛者だったと決めつけられた。そしてこの性癖のために彼は墮落・腐敗した人間になっていたが、それは西側の汚濁した世界の影響を受けた結果だとされたのである。さらにリトフィンには出国ビザを申請する道が開かれていたとも主張された。実際にはそれは理論上の可能性でしかなく、出国が認められる可能性は皆無だったことを考えれば、自国民を閉じ込めた壁を正当化する詭弁にすぎなかったのは明白であろう。むしろ、壁によって自国民を閉じ込めるという世界に類例のない措置が銃撃による死の危険を冒してまで「国境を実力で突破する試み」を生み出したのであり、ベルリンの壁が一般的な国境とは違い、分断国家の一方が他方への市民の移動を阻止するという比類のない性格を有していた点にこそ問題の核心が存在していたのである。

なお、リトフィンが非業の死を遂げた5日後に第2の犠牲者が発生した。8月29日にローラント・ホフという27歳の若者がやはり泳いで逃亡しようとして銃撃を浴び、死亡したのである。場所はテルトウ運河であり、アメリカ地区を目指したホフは警備兵の銃弾に斃れたのである。²¹一方、銃撃や地雷によらない死者はリトフィン以前に2人いる。1961年8月19日に壁際の住宅で暮らしていた47歳のルドルフ・ウァバンが死亡したのである。彼は同居者たちとともに逃亡を図り、西側に属すベルナウアー通りに窓からロープで降りようとしたが、誤って転落したのである。同様に22日には59歳のイダ・ジークマンが同じく窓からベルナウアー通りに飛び降りて逃亡しようとしたものの、着地に失敗して死亡した。²²ベルリンの壁建設直後の2人の死は事故死に数えられるが、壁に起因する逃亡に伴う悲劇であることから、壁の犠牲者に含まれるのは当然であり、例えばベルリン市当局の文書ではこの人たちもその列に加えられている。²³また、リトフィンが死亡した現場には、追憶のために現在では石碑が据えられている。同様に、近くのキーラー通りにあった監視塔は市当局によって保存されていたが、弟のユルゲン・リトフィンの努力で2003年から兄の死とベルリンの壁を記念する数少ない博物館として使用されるようになったことを付け加えて

おこう。²²⁸

4. その他の犠牲者と責任追及

ここまでベルリンの壁が作られた1961年に最初に死亡したリトフィンと壁が崩れた1989年に最後に命を落としたギュフロイについて見てきた。彼らはいずれも壁を乗り越えようとして銃弾を浴びたが、この2人が悲劇に見舞われた年度の間接点に当たる1975年には東ドイツから逃亡しようとしたのではないのに死に至った事例が発生した。これも広い意味では壁の犠牲に数えられるので、ここで簡単に触れておきたい。²²⁹

1975年5月11日の日曜日、今日ではトルコ系移民が集中していることでよく知られているクロイツベルク地区で事件は起こった。トルコ系移民の子供で誕生日を迎えたばかりの5歳の子供がプレゼントのボールで近所の子供と遊んでいた。名前はチェティン・メルトという。場所はシュプレー川の川べりであり、そこでは川の水面は東ベルリンに属し、岸からが西ベルリンだった。たまたまボールが岸の斜面を転がり、それを追いかけた子供は棒で止めようとしたが、バランスを崩して川に転落したのである。子供は水泳ができなかったので救助が必要であり、通行人がいたら簡単に助けることが可能だった。その点からみると、水面が東ベルリンの一部だったことは子供にとって死刑判決に等しかった。というのは、川は警備兵によって監視されており、岸から飛び込めば不法越境と見做されたからである。²³⁰

そうした事情から、通行人は身動きが取れず、近くの橋上にいた警備兵に援助を呼びかけると同時に、西ベルリンの消防にも通報した。駆け付けた消防隊は警備兵と話したが、無駄に終わった。警備兵も迂闊に川に入って西側の岸に近づくと、逃亡と見做される危険があったからである。こうして数時間が無益に経過し、ようやく東ベルリンの潜水夫が川から引き上げた時には、子供はすでに絶命していた。その場所は西ベルリンに属す岸からほんの数メートルのところだった。引き上げは両親と多数の群衆が見守る中で行われ、遺体が上がる

と岸に運ぶように呼びかけたが、これも無駄だった。遺体は警備艇で運ばれ、東ベルリンで検死を受けた。その後、東西ベルリンの検問所を通して両親のもとに返されたのである。

1975年のこの子供の死は確かに事故に数えられよう。事実、それは先述した138人という壁の犠牲者には含まれていない。けれども、ベルリンの壁がなく、あるいは少なくとも境界線が水面の真ん中にあったならば、簡単に救助できた事故であり、子供は死なずに済んだはずであろう。そして実はこの死亡事故は初めてではなく、4件目であり、前年の1974年6月15日にもやはりクロイツベルクに住むイタリア系移民の6歳になる子供がシュプレー川で水死する事故が発生していたのである。⁹⁹そのため、救助に動かない警備兵の姿に怒りを募らせた西ベルリン当局は川岸を封鎖する挙に出た。それを受け、東ベルリンも協議に応じ、警報装置を設置するとともに救援を行うことで東西ベルリンは合意した。この合意のプロセスは明らかになっていないが、同年には人権の尊重を謳った全欧安保協力会議のヘルシンキ最終文書が署名され、東ドイツも人権重視を国際的に公約したことが一因になっていたと考えるのが自然であろう。いずれにしても、リトフィンとギュフロイの中間時点で発生したベルリンの壁の犠牲者は、それを乗り越え東ドイツからの逃亡を図って死亡したのではなかったのである。

次にもう一点、ベルリンの壁での犠牲者に関連する問題に論及しておきたい。それはリトフィンたちに発砲した国境警備兵をはじめとする関係者の責任追及であり、具体的には壁での殺人に関する法的責任を問う裁判のことである。

周知のように、戦後の西ドイツではナチス・ドイツの「過去の克服」が長く重い課題になっていた。しかしドイツ統一に伴い、これにはもう一つの「過去の克服」という課題が加わった。東ドイツの独裁体制下で統一ドイツの土台となるべき憲法的価値が蹂躪されてきたからである。そして統一を果たしたドイツでこの課題との取り組みを象徴したのが、壁での殺人をめぐる裁判だった。この裁判には、事実上東ドイツを飲み込んだ西ドイツが自分たちの価値観に基づいて東ドイツの過去を断罪するという側面があり、東ドイツ地域の市民の多

くにとっては割り切れなさが残った。実際、被告席に立たされたのは東ドイツ出身者だったのに対して、罪を追及する検察官も裁きを下す裁判官も西ドイツ出身だったことを考えれば、公平性に疑義があったのは否定できないであろう。

遡及効をはじめとする種々の法律上の論点を別にすると、壁の裁判には二つの注目点があった。ドイツ内部国境にせよベルリンの壁にせよ被害者が生じたケースは本来ならすべて裁判の対象になるべきだったが、犯罪の立証が可能とされる事件だけが取り上げられたのが一つである。もう一つは、実行犯である末端の警備兵と並び、最高責任者であるホーネッカーもまた責任を問われたことである。

メディアの注目を浴びたのは、ギュフロイに対して発砲し殺害に及んだ事件である。それは同時に壁での殺人を扱う裁判の第1陣でもあった。ベルリン地裁で開かれた法廷で被告席に立ったのは、徴兵の際のシュタージによる人物調査を踏まえて国境警備部隊に配属された、特に目立つところのない東ドイツの普通の若者4人だった。初公判が開始されたのは1991年9月だったが、その時点で26歳の電気工インゴ・ハインリヒ、27歳の電気工アンドレアス・キューンバスト、26歳の機械工マイク・シュミット、26歳の電気工ペーター＝ミヒャエル・シュメットが殺人の罪で起訴されたのである。彼らは異口同音に命令に従うことは義務であり、発砲は義務の履行だったと主張したが、それは同時にこの裁判の中心的争点でもあった。検察側は正常な判断力と人間としての良心があるなら、発砲命令に従うことの是非は識別できたはずだと主張し、命令を守ったことの誤りを追及した。これに対し、弁護側は検察側の主張は普通の人間に英雄になれと要求しているのと同じだと反論し、英雄にならなかったことを裁くのは不当であると主張したのである。⁴⁰

判決は1992年1月に下ったが、ギュフロイの上半身を狙い、命中しやすいように膝をついて発砲して致命傷を与えたハインリヒは禁固3年半の実刑となった。一方、ギュフロイたちの頭上を目がけて撃ったキューンバストには禁固2年の実刑が言い渡されたが、執行猶予が付けられた。またシュミットとシュメットは無罪とされた。前者は撃てと言っただけで引き金をひかなかったのが理

由であり、後者は足を狙って撃ったので殺意は認められないと判断されたからである。このベルリン地裁での第一審の判決は上訴され、1993年3月に上訴についての判決公判があった。ハインリヒについては量刑に問題があるとしてベルリン地裁に差し戻されたが、キューンパストは狙いが遠くだったので殺意はないとして無罪とされた。またシュメットの無罪はそのまま支持されたが、シュミットの場合は殺意の有無の確認が必要という理由で差し戻された。これらの判決は総じて軽いといえ、殺人という重罪が問われているにもかかわらず、命令に従ったという事情を考慮したのは間違いなしと思われる。

いずれにせよ、裁判はここでも決着せず、1994年3月の連邦裁判所の判決でようやく終結した。結果は刑罰が一段と軽減され、ハインリヒは2年の保護観察にとどまった。またシュミットは無罪とされたので、4人のうちで有罪とされたのは1人だけということになった。このように一審判決に比べて軽い刑になったのは、第一線の警備兵の責任を問うことに対する疑義と並び、西ドイツの裁判官が東ドイツ人を被告席に立たせた勝者の裁きという批判を考慮したためだと思われる。ともあれ、刑は軽減されたにせよ、裁判所が発砲の根拠とされた東ドイツの国境法は人権を侵害する法律であって無効という立場を明示し、この観点から被告たちを裁いた事実は重い意味を持つ。一つには、4人の国境警備兵の裁判を突破口にして壁と内部国境での殺人に関する裁判が続けられることになったからである。また今一つには、第一線の警備兵を発砲命令で縛った東ドイツの指導者の責任が問われることになったからである。

消滅した東ドイツで指導部の頂点に立っていたのは、多年にわたり国家評議会議長を務めたホーネッカーだった。彼は解任から半年ほど経った1990年4月に東ドイツ国内のソ連軍の病院に逃げ込み、ドイツ統一後の91年3月からはモスクワのチリ大使館に匿われたが、1992年7月に身柄がドイツ側に引き渡された。これに伴い、彼はベルリンの拘置所に収監され、かつての最高権力者は刑事被告人になった。壁での殺人で起訴されたのはホーネッカーだけではなかった。ケスラー元国防相、シュトフ元首相、シュトレーレッツ元国防次官、アルブレヒト元ズール地区党第一書記など合わせて6人の指導者が法廷に立たされ

たのである。ただミールケ元シュタージ大臣のみは壁での殺人の罪ではなく、ナチス前夜の警察官殺害という、通常ならば時効が成立しているはずの犯罪で起訴された。

裁判に当たり、検察側は1974年に東ドイツの国防評議会が下した、逃亡を阻止するために容赦なく発砲するという決定に彼らが参画したことを重視し、ベルリンの壁とドイツ内部国境で発生した12件、13人の殺人に絞って起訴した。そのなかには東ドイツの刑法では既に時効が完成しているケースも含まれた。独裁体制下では壁などでの殺人を立件することが不可能だったことを理由にして時効を認めない方針をとったからである。これにより裁判を通じて壁での殺人の経緯と責任の解明がなされることが期待された。けれども、1992年11月に裁判が始まって間もなく、肝臓癌の悪化のためにホーネッカーに対する公判を続けるのは困難になり、ベルリン憲法裁判所の指示で93年1月に裁判は中止された。これを受け、死期の近い彼は妻と娘のいるチリへの出国を許され、その地で翌年5月に死去した。同様に元首相の要職にあったシュトフも病気で裁判から脱落した。こうして壁と内部国境での殺人について第一線の国境警備兵は法的責任を問われたのに反し、最高権力者を裁く道は閉ざされ、刑事責任を追究する機会は永遠に失われた。ただ残った指導者たちの裁判は続けられ、1993年9月16日に判決が言い渡された。ケスラーは求刑10年に対し禁固7年半、シュトレレッツは求刑10年に対し禁固5年半、アルブレヒトは求刑8年に対し禁固4年半であり、全員が有罪判決を受けたのである。²⁸

これと並行する形で、ギュフロイを死に迫いやった国境警備兵の裁判を突破口にして、次々とかつての警備兵が被告として法廷に立たされた。そして、その一連の裁判ではベルリンの壁における最初の犠牲者であるリトフィンを殺害した2人の警官も裁かれたのである。1997年に宣告された判決では、ヘルベルト・プラウルに1年半、ハインツ・ライヒェルに1年の禁固が言い渡された。こうして2人は有罪とされたものの、判決ではこの刑に執行猶予が付けられたため、彼らは刑務所に収監されなかった。その点で、ギュフロイ裁判の場合と同様に、有罪という外形は示されても実質となる刑罰は軽かったといえ、結局、

銃撃した者の誰一人として服役しないで終わった。これに照らしても、壁での殺人を裁いた裁判の主たる標的が東ドイツの指導者たちに絞られていたことは明白であろう。

ともあれ、裁判が継続していた1999年の時点におけるボリンたちのまとめによれば、それまでに第一線の警備兵とその上の指導部を含めて226人が起訴され、公判が開かれた。そのうちで78人に対して有罪が宣告された一方で、45人が無罪とされた。また起訴された警備兵の総数は111人であり、禁固刑に処されたのはそのなかの僅か2人だけだった。61人には有罪であっても執行猶予が付けられ、44人の元兵士は無罪になったのである。⁹²一方、それから10年経過した2009年にポツダム現代史研究センターが中心になってハンドブックを編集したが、それに付された総説によると、兵士のような実行犯だけでなく、指示した幹部、協力者など広く壁殺人に関与した罪で起訴された総数は246人であり、132人が有罪判決を受けた。そのうちの10人がSED指導部のメンバーであり、42人が国境警備隊ないし国家人民軍の幹部だった。これに対し、一般の警備兵で有罪になったのは80人であり、数としては多かった。けれども、刑罰の面で大きな開きがあった。国防評議会のメンバーだった者は60ヶ月から80ヶ月の懲役、SED指導部にいた者は36ヶ月から78ヶ月の懲役、国家人民軍・国境警備隊幹部は12ヶ月から78ヶ月の懲役に処された。しかし、兵士の場合、執行猶予が大多数だったのに加え、ほとんど執行されずに終わった刑期も6ヶ月から24ヶ月にとどまったのである。⁹³

5. 若干の考察－結びに代えて

以上でベルリンの壁における最初と最後の犠牲者についてそのプロフィールを簡単に紹介しつつ、死亡に至った経緯などを辿ってきた。⁹⁴一つの都市を引き裂くベルリンの壁は東西陣営の対立という冷戦のシンボルであったが、同時に、ドイツ分断の象徴でもあった。本稿で光を当てた二人の人物は、分断国家の一方で育ったのであり、いずれも壁の向こうに行きたいと望み、正規のルートで

は叶えられないために非合法な手段に訴えた結果、死に追いやられたのである。確かに東ドイツの法律ではベルリンの壁を許可なく超えるのは違法であり、禁じられていた。しかし、人権の観点からみるなら、東ドイツを出たいという市民の願望を蹂躪し、出国の実力行使に銃弾に応じる国家が不法でなかったとはいえないであろう。ベルリンの壁の構築は西側世界を驚愕させたが、そこでの犠牲は東ドイツの対外イメージを著しく損なった。壁自体がグロテスクな存在だったが、それには死の臭いが染み付いたからである。もっとも、自国民を閉じ込めた壁によって東ドイツがようやく国家として安定するようになったことは別稿で指摘したとおりであり、それによってヨーロッパを危機に晒したドイツ問題の重圧が軽減されたことは冷厳な事実として確認されなければならないであろう。その意味では、ヨーロッパの安定は犠牲者を生みだす壁の上で保たれたのであり、東ドイツの市民を代償にして獲得されたのである。

ところで、東ベルリンから西ベルリンへの逃亡はもっぱらベルリンの壁を乗り越えて行われたわけではない。実はベルリンの壁をよじ登るのは危険が大きいために、むしろ他の方法で越境するケースのほうが遥かに多かったのが事実だった。この点に関しては、車を改造して身を隠したのをはじめ、トンネルを掘ったり、あるいは熱気球で上空を越えるなどの様々な手段が使われたことがベルリンの壁に関する著作で度々紹介されている。また、人の意表を衝いた数々の方法がチェック・ポイント・チャーリーの協のベルリンの壁博物館に展示されているだけでなく、壁崩壊の20周年が近付いた2009年秋には、例えば9月1日付『フランクフルター・アルゲマイネ』紙や11月3日付『ジュートドイッチェ』紙などでDDR逃亡の成功例が詳しく報じられている。^㉔

数あるなかの一例として、冷戦をテーマにした2008年の『シュピーゲル』特別号にヴォルフガング・エンゲルスが寄せている手記が興味深い。1943年生まれの彼は、国家人民軍の兵士として1961年にベルリンの壁の建設に従事した。しかし、それから2年もたたない1963年4月17日にエンゲルスは担当の装甲車を駆って検問所を突破し、西ベルリンへの脱出を果たしたのである。^㉕また、1978年8月30日には、給仕として働いていた33歳のアレクサンダー・ティーデ

が東ベルリンとポーランドの間を飛んでいたポーランドの旅客機を乗っ取り、西ベルリンのテンベルホーフ空港に着陸させた。2008年11月11日に『フォークス』はこれを「最も大胆不敵なDDR逃亡」と名付けて詳しく伝えているが、それによると、この事件で西ベルリンに到着した乗客の中にはそのまま西側に居着いたDDRの家族もあり、ティーデに感謝しているという。もっとも、このような手段が例外的であるのはいうまでもないが、いずれにしても、越境のために壁を迂回したケースが多かった事実に留意する必要がある。例えば、バルト海を泳いで西ドイツに逃げ込む企てが頻繁に実行され、かつてシュタージ文書管理機関を率いたJ. ガウクは5000人がこれを試みたとしつつ、しかし成功したのは200人を下回り、死者も相当数いると推定している。⁹⁴さらにこれらの点と並んで、ベルリンの壁を越えようと企てた市民の多くが銃撃で命を失ったわけでもないことも注意を要する。実際には越境に失敗して拘束され、刑務所に入れられた者のほうが命を落とした者より遙かに多かったのである。あるデータによれば、1963年の東ドイツにおける受刑者14000人のうち半数以上の8000人は逃亡を試みて失敗したり、逃亡を幫助した者だったのである。⁹⁵

もちろん、東ドイツから西ドイツへの脱出はベルリンの壁を跨ぐ形で東西ベルリン間で行われただけではなかった。ベルリンの壁の越境はドラマティックではあるが、逃亡はむしろドイツ内部国境や第三国経由で試みられたのである。例えば内部国境の突破に関して2007年11月の『シュピーゲル』にR.シンツェルという人物が詳細な手記を寄稿しているが、1963年当時17歳だった彼が二人の友人とともに地雷が埋設してあることを知らないまま、鉄条網を越えてテューリンゲンから西ドイツに脱出するのに成功した経過は、今日からみると実話とは思えないほどスリリングに感じられる。⁹⁶このケースのようにベルリンの壁や内部国境を越えて逃亡に成功したのは壁構築の1961年から東欧変革が始まる直前の1988年までで4万101人だったが、一方、第三国経由などの脱出者は17万8182人を数え、前者の4倍以上だったのである。⁹⁷

もっとも、第三国経由の場合でも常に安全だったとは限らない。同じく2008年1月の『シュピーゲル』では、ソフィアで資料調査を行った政治学者S.アペ

リウスの手により、1966年に安全だと思われていたブルガリアからギリシャに抜ける計画だった二人の東ドイツの青年がシュタージに察知されて消息不明になった経緯が掘り起こされている。⁸⁸また2008年5月5日付『ジュートドイッチェ』紙と2009年11月4日付『ツァイト』紙では、同じ経路で20歳と21歳の二人の若者が1979年に越境を試みて銃撃を浴び、瀕死の重傷を負った事例と1988年に26歳の繊維労働者の青年が銃撃によりブルガリアで死亡したケースが詳しく報じられている。⁸⁹これらの例に見られるように、第三国経由であっても、逃亡が発覚して拘束されたり、生死の危険に陥っただけではなく、死に至るケースも存在したのである。シュタージ文書管理機関に所属するM.タンチャーの調査報告によれば、東欧圏の国を経て逃亡に成功したDDR市民は8000人であり、2万5000人が未然に拘束されるか越境を阻止された。また、ブルガリア経由では2000人から4500人が逃亡を図ったと推定されている。⁹⁰いずれにせよ、ベルリンの壁の過酷さとそこでの犠牲者の悲劇に引きずられて、越境は東西ドイツの間、それどころか主として東西ベルリンの間で行われたとの印象を抱きがちだが、上記の数字に照らせば、そうした想像が事実から懸け隔たっているのは明白であろう。

他方、ギュフロイやリトフィンのように、ベルリンの壁にせよ内部国境にせよ不法な越境を企てて死に至った事例はいくつも存在している。けれども、その人数がどれほどなのは、意外にも今日なお判明していない。別稿でこの点に関して検討し、様々な機関や団体が公表している数字を紹介したが、200人台から1000人前後までかなりの幅がみられるのが現状といわねばならない。また壁や内部国境で非運に斃れたのは脱出を図った人々に限られなかった。警備兵で逃亡を試みた者は少なくなかったが、その場合には武器を携帯していることが示すように、境界を守護する警備兵の側にも反撃を浴びて犠牲者が生じたからである。さらに東ドイツからの逃亡を幫助するグループがいたことが知られているが、その一部も死に至ったことは、「自由買い」で西ドイツに引き渡されたのちに31人の逃亡幫助に従事し、最後はシュタージの罠にかかって1976年に射殺されたM.ガルテンシュレーガーの例を見れば明白であろう。⁹¹因みに、

逃亡幫助者として知られるH.リヒターは33人を逃がした実績があるが、1975年に失敗して逮捕され、反国家的人身取引の罪で15年の刑を受け、翌76年にはR.シューベルトが同じ罪状でやはり15年の刑を宣告されている。⁴²もともと、他方にはもっぱら金銭的目的で逃亡幫助に従事した者もあり、その一部も捕まったが、K.W.フリッケが強調するように、そうした人々まで抵抗者の列に加えることはできないであろう。⁴³いずれにせよ、数字に幅はあるものの、1700万人の人口を擁した東ドイツで越境のために相当数の市民が命を落としたことは間違いないが、犠牲者の規模を大きいとみるか小さいとみるかは評価の分かれる点であり、速断することはできない。

けれども、犠牲者から目を離し、禁止されている共和国逃亡を図った人々を含め、何らかの政治的理由で犯罪者とされ、刑に服した市民にまで視界を広げるなら、犠牲者の位置づけが可能になるように思われる。そうした人々は総計で25万人に上ったとされ、東ドイツ脱出に失敗した市民がかなりの部分を占めていたのは確実と見られている。この点を考慮すれば、死亡した犠牲者はそのごく一部であり、逃亡失敗者という氷山の一角にすぎないといえよう。さらに第3国経由を中心に逃亡に成功した人々をこれに加えた場合、成否を問わず脱出を試みた人々は総計で40万人程度に達すると推定されている。

また上記のように1975年のヘルシンキ最終文書に東ドイツが署名し、人権尊重を国際公約したのを契機にして出国の可能性が現実味を帯び、これを受けて出国申請が急増した。表1が示すように、初めての申請者の数は1977年の8400人から10年後の1987年には4万3200人に達したのである。この事実は、生命の危険の伴う不法越境は諦めても、合法的で安全が保証されているなら東ドイツを離脱したいと望む市民がかなりの規模で存在していることを明るみに出した。

無論、旅行の自由や国籍離脱の自由がほとんど自明な権利になっている西側諸国と違い、申請した全員が出国を許可されたわけではなかったのは指摘するまでもない。それどころか、申請自体を断念したり取り下げたりするように職場や学校などで様々な圧力が加えられたことが今日では知られている。確かに

表 1 国外出国申請と出国許可

単位：1000人

年度	出国申請	初回申請	申請撤回	出国許可
1977	-	8,4	0,8	3,5
1978	-	5,4	0,7	4,9
1979	-	7,7	4,3	5,4
1980	21,5	9,8	4,7	4,4
1981	23,0	12,3	5,0	9,2
1982	24,9	13,5	6,5	7,8
1983	30,4	14,8	5,6	6,7
1984	50,6	57,6	17,3	29,8
1985	53,0	27,3	11,3	17,4
1986	78,6	50,6	10,8	16,0
1987	105,1	43,2	12,8	7,6
1988	113,5	42,4	11,7	25,3
1989(6月30日まで)	125,4	23,0	1,4	34,6

(出典) Falco Werkentin, Recht und Justiz im SED-Staat, Bonn 1998, S.102

出国を申請すること自体は適法だったが、東ドイツを嫌っていることの表明と見做され、重罪である共和国逃亡を目論む容疑者として扱われることになった。⁴⁴ 事実、シュタージはこの問題を担当する「中央調整部」(BKG)という部局を設置し、地区の行政機構に配置された地区調整部はシュタージ、人民警察、内務部を調整して申請者を締め付けたのである。そのために申請を提出する場合には、重大な不利益を被る覚悟しなくてはならず、厳しい決断を迫られた。⁴⁵ 表1に見られるように、申請の撤回が多かったのはその結果にほかならない。出国を希望する動機については、自由な暮らしへの渴望から西ドイツの豊かさへの憧れに至るまで幅広くあり、改めて検討を要する。同様に、出国申請者を最初の市民運動と見做す立場がある一方で、DDRにとどまり、その改革を目指した人々からはエゴイスティックと見られていたのも事実であり、「幻滅した出国者と変化を望むとどまる人たちとの摩擦」が存在することにも注意が必要であろう。⁴⁶ いずれにしても、ベルリンの壁や内部国境で非業の死を遂げた犠牲者を出国希望者と見做し、その広い文脈に位置付けるならば、自国民を實力で閉じ込めた東ドイツは国民から広範に支持されていたとはいえない事実が浮き彫りになる。壁の犠牲者には広大な裾野が存在していたことになるからで

ある。

もちろん、他方には不法越境など夢にも思わず、出国の申請すら考えもしなかった多数の東ドイツ市民が存在したことを忘れてはならない。いかなる国家といえども、不法越境に伴う危険に対する恐怖心だけで長期にわたって支配を続けることはできないのは自明だからである。この点に照準を合わせれば、東ドイツが国家として市民から忠誠と支持を集めていたメカニズムを分析する必要がある。その場合、なによりも東ドイツの光の側面に視線を向けることが重要になる。すなわち、表向きは完全雇用で失業者がおらず、ホームレスや物乞いなども存在しなかったこと、充実した託児制度のために子供がいても女性が安心して働け、宣伝ほどではなくても男女の同権が進んでいたこと、品質は劣るが食品の価格や住居の家賃が低い水準に抑えられていたことなど、総じて社会主義の成果といわれる特色に的を絞り、それらがどのようにして実現されていたのかを検討されなければならない。それは同時に、統一から20年近くになる今日、東ドイツ地域に広がっているいわゆるオスタルギーの問題とも重なる。ベルリンの壁での犠牲者を振り返る時、不本意な死を悼むことに終わらせるのではなく、その背景と文脈を追跡するならば、消滅した東ドイツの現実を冷静に把握する道が開かれると同時に、ベルリンの壁に代わって近年強まりつつある東西ドイツ間の心の壁の理解にもつながると思われるのである。

注

- (1) Oliver Gehrs, Die Stille nach dem Schuss, in: Bundeszentrale für politische Bildung, hrsg., DDR, Bonn 2009, S.23.
- (2) Constanze von Bullion, Licht auf dem Todesstreifen, in: Süddeutsche Zeitung vom 12.8.2009.
- (3) Evelyn Finger, Wo viel Opfer, da viel Diktatur?, in: Die Zeit, Nr.34, 2006.
- (4) Hauke Friedrichs, Lautstark gegen die Ostalgie, in: Die Zeit vom 13.8.2009.
- (5) Zentrum für Zeithistorische Forschung und Stiftung Berliner Mauer, hrsg., Die Todesopfer an der Berliner Mauer 1961-1989, Berlin 2009, S.15f.
- (6) Thorsten Denkler, Des Erinnerns ist jeder würdig, in: Süddeutsche Zeitung vom

13.8.2009.

- (7) Martin Ahrends u.a., Winfried Freudenberg, in: Zentrum für Zeithistorische Forschung u.a., hrsg., op.cit., S.434ff.
- (8) Hans-Hermann Hertle, Die Berliner Mauer, Bonn 2007, S.109.; Thomas Flemming und Hagen Koch, Die Berliner Mauer, Berlin 2001, S.115.
- (9) Regina Mönch, Die fast vergessenen Grenzfälle, in: Frankfurter Allgemeine Zeitung vom 13.8.2007.
- (10) Armin Fuhrer, Die Wende kam neun Monate zu spät, in: Focus vom 5.2.2009.
- (11) 永井清彦『現代史ベルリン』朝日新聞社、1990年、134頁。
- (12) Edgar Wolfrum, Die Mauer: Geschichte einer Teilung, München 2009, S.10.
- (13) 以下のギュフロイに関する記述は、Sven Felix Kellerhoff, Der sinnlose Tod des DDR-Bürgers Chris Gueffroy, in: Die Welt vom 5.2.2009.; Kerstin Decker, Freiheitsträume, in: Der Tagesspiegel vom 5.2.2009.; Fuhrer, op.cit.のほか、Baron und Hans-Hermann Hertle, Chris Gueffroy, in: Zentrum für Zeithistorische Forschung Potsdam u.a., hrsg., op.cit., S.429ffなどに基づいている。
- (14) Jonas Reese, Per Anhalter in den Westen, in: Süddeutsche Zeitung vom 3.11.2009.; Annette Leo, Das Bild der DDR und des realen Sozialismus, in: Bernd Faulenbach u.a., hrsg., Zweierlei Geschichte, Essen 2000, S.262.
- (15) Stiftung Gedenkstätte Berlin-Hohenschönhausen, hrsg., Die vergessenen Opfer der Mauer, Berlin 2001, S.33.
- (16) Flemming u.a., op. cit., S.115.
- (17) Peter Joachim Lapp, Verwirrung um den Schiessbefehl, in: Deutschland Archiv, H.5, 2007, S.775.
- (18) 森千春『壁が崩壊して』丸善、1995年、124頁。
- (19) 以下のリトフィンに関する記述は、Thomas Klug, Der Jugendliche Günter Litfin ist das erste Maueropfer, in: Deutschlandfunk-Nachrichten vom 24.8.2001.; Barbara Hans, Tod durch fremde Hand, in: Der Spiegel vom 2.9.2007.のほか、Christine Brecht, Günter Litfin, in: Zentrum für Zeithistorische Forschung Potsdam u.a., hrsg., op.cit., S.37ffによる。
- (20) Frederick Taylor, Die Mauer, München 2009, S.312ff.
- (21) Zentrum für Zeithistorische Forschung u.a., hrsg., op.cit., S.34ff.
- (22) Presse- und Informationsamt des Landes Berlin, Die Mauer und ihr Fall, Berlin 1994, S.27.
- (23) Martin Jander, Orte der SED-Herrschaft Berlin, Berlin 2007, S.34.
- (24) Martin Ahrends, Tod an der Mauer, in: Die Zeit, Nr.12, 2009.

- (25) Udo Baron u.a., Cetin Mert, in: Zentrum für Zeithistorische Forschung u.a., hrsg., op.cit., S.365ff.
- (26) Zentrum für Zeithistorische Forschung u.a., hrsg., op.cit., S.358ff参照。
- (27) ティナ・ローゼンバーク、平野和子訳『過去と闘う国々』新曜社、1999年、397頁。
- (28) 森、前掲書、120頁。
- (29) Christina Bollin und Peter Fischer-Bollin, Mauer, in: Werner Weidenfeld und Karl-Rudolf Korte, hrsg., Handbuch zur deutschen Einheit 1949-1989-1999, Frankfurt a.M. 1999, S.550.
- (30) Zentrum für Zeithistorische Forschung u.a., op.cit., S.24f.
- (31) 壁での犠牲者の詳細なプロフィールはほとんど見当たらないが、1963年にやはりシュプレ川を泳いで越境しようとして射殺されたK.シュレーターについてはプロフィール、DDRでの射殺の法的処理、埋葬、遺族、統一後の裁判などに光を当てた冊子が存在している。Die Landesbeauftragte für die Unterlagen des Staatssicherheitsdienstes der ehemaligen DDR in Sachsen-Anhalt, Tod in der Spree, Magdeburg 2001.
- (32) 加えて、Hertle, op.cit., S.72ff.; Flemming u.a., op.cit., S.48ff参照。
- (33) Wolfgang Engels, Mit dem Panzer durch den Todesstreifen, in: Spiegel Spezial, Nr.3, 2008, S.74f.
- (34) Joachim Gauck, Die Flucht der Insassen, Berlin 2009, S.8.; Christian Kamp, Der Freischwimmer, in: Frankfurter Allgemeine Zeitung vom 1.9.2009.
- (35) ローゼンバーク、前掲書、399頁。
- (36) Rainer Schinzel, Durch Stacheldraht und Minenfeld, in: Der Spiegel vom 8.11.2007.
- (37) これを伝える例として、機械製造を学んだのに進学を拒否され、1964年にユーゴスラヴィアを経由して西ドイツに逃亡するのに成功したE.ラシュケの手記がある。Erhard Raschke, Meine Flucht 1964 aus der DDR in den Westen, Magdeburg 2000.
- (38) Stefan Appelius, Das Rätsel der verschwundenen Leichen, in: Der Spiegel vom 12.1.2008.
- (39) Cathrin Kahlweit, An der Grenze des Lebens, in: Süddeutsche Zeitung vom 5.5.2008.; Martin Athenstädt, Maueropfer ohne Mauer, in: Die Zeit vom 4.11.2009.
- (40) Monika Tantzsch, Die verlängerte Mauer: Die Zusammenarbeit der Sicherheitsdienste der Warschauer-Pakt-Staaten bei der Verhinderung von "Republikflucht", Berlin 1998.; Uwe Müller, Ein Held im Kampf gegen Mauer und Stacheldraht, in: Die Welt vom 12.8.2009.
- (41) Stefan Wolle, Michael Gartenschläger, in: Ilko-Sascha Kowalczyk und Tom Sello, hrsg., Für ein freies Land mit freien Menschen, Berlin 2006, S.119ff.; Uwe Müller,

- Ein Held im Kampf gegen Mauer und Stacheldraht, in: Die Welt vom 12.8.2009.
- (42) Stiftung Gedenkstätte Berlin-Hohenschönhausen, op.cit., S.30.
- (43) Karl Wilhelm Fricke, Fluchthilfe als Widerstand im Kalten Krieg, in: Aus Politik und Zeitgeschichte, B38/1999, S.9f.
- (44) アナ・ファンダー、伊達淳訳『監視国家』白水社、2005年、52頁。
- (45) Der Berliner Landesbeauftragte für die Unterlagen des Staatssicherheitsdienstes der ehemaligen DDR, Diesseits und Jenseits der Mauer, Berlin 1998, S.15.
- (46) Matthias Schlegel, Rübermachen oder bleiben, in: Die Zeit vom 27.7.2009.